

🚨 喉頭を失った方々のための人工喉頭「ユアトーン」の開発

喉頭癌などで喉頭を摘出したために声を失った方々のための声の元となる電機式人工喉頭「ユアトーン ゆらぎ」の開発。国産初の前作「ユアトーン」の利用者からの改良の声を受け「聞き取りやすさ」の追求と「柔らかさ」を音源に組み込んだ改良製品の開発。

本業の動向について

電気機器の製造。電力業者向けの制御版、配電盤、システム等の開発を主要業とする。

近年の設備予算の切り詰め。昨今の電力に対する社会情勢に左右されやすい。

公設研究機関との連携事業について

連携先公設研究機関の名称

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
産業技術研究本部工業試験場

所在地

北海道札幌市北区北 19 条西 11 丁目

連携内容

喉頭癌などで喉頭を摘出されて声を失った方々のための、声の元となる電機式人工喉頭「ユアトーン ゆらぎ」の開発。

連携した動機やきっかけ

北海道総合研究機構と北海道大学が人工喉頭の研究を行っていることを知り、そこへ参加することを申し込み、国産初の電機式人工喉頭「ユアトーン」を開発したのが、今から十年ほど前のことである。その後も北海道総合研究機構とは良い関係を保ち、また、「ユアトーン」のエンドユーザーなどからの改良点などの声を受け、聞き取りやすさの追求と柔らかさを与える「ゆらぎ」を音源に組み込み、今回も連携により改良品の開発を行い、二年前にモデルチェンジをした「ユアトーン ゆらぎ」の製品化に至った。

連携の効果

連携開発を行ったことで実用化、製品化が出来たこと。十年前に前作を開発したときは国内初であり、その後も人工喉頭に関しては国内シェア 1 位を守り続けている。

連携して最も成果のあったこと

人工喉頭の実用化、製品化ができたこと。民間では持っていない設備を持っておりそれを活用できたこと。

実用化へ向けての試作段階における試験等にも困ることが無かった。

連携して最も困難だったこと

あまり感じていないがあえていうなら、研究期間がきまっていること。書類などが多く事務手続きが煩雑であったこと。

連携するメリット・デメリットについて

メリットとしては製品化に伴う技術的バックアップが受けられること。デメリットとしては困難なことと同じで書類などが多く事務手続きが煩雑であること。

連携に際しての注意、アドバイスなど

開発したいもの、目的をはっきりと示すこと。自分たちが出来る事、部分を提示すること、どの部分で助けてほしいかを提示すること。

公設研究機関との連携で行政に望む支援

特に無いがあえていうなら、技術開発を行うには資金が必要なので技術開発への補助金、助成金、支援。

会社概要

設 立 : 1977 年(昭和 52 年)9 月

資 本 金 : 4,900 万円

従業員数 : 77 名

U R L : <http://www.dencom.co.jp>